

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月16日現在

機関番号：17102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：20010～2012

課題番号：22656136

研究課題名（和文） パリ外国宣教会と長崎の教会群との関係に関する研究

研究課題名（英文） A Study on the relationship between *Missions Etrangères de Paris* and the churches in Nagasaki

研究代表者

土居 義岳 (DOI YOSHITAKE)

九州大学・芸術工学研究院・教授

研究者番号：00227696

研究成果の概要（和文）：

19世紀長崎における教会堂建設と、同時代のパリなどフランスでの教会堂建設との関連を調査した結果、黒島教会とサンタンブローズ教会という酷似例があることともに、19世紀中盤に聖職者育成の教科書として出版された『マニュアル』、香港に建設されたセントリウムであるベタニーの付属礼拝堂、が媒介となってフランス的な教会堂が宣教師たちに影響を与えたということが判明した。

研究成果の概要（英文）：

As the result of the study on the church buildings in the 19<sup>th</sup> century in Nagasaki, the contemporary French and Parisian churches and their relationship, it is revealed that there is an example of important stylistic and spatial similarities between Kurishima church and Saint-Ambroise church, and that the *Manuel* of 1846, a church building handbook for the education for clergymen, and Bethanie, the Hong Kong sanatorium for catholic missionaries, can be regarded as a catalyst through that the missionaries were influenced by the contemporary French architecture of churches.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	0	1,300,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	540,000	3,640,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠

キーワード：パリ外国宣教会、長崎の教会群

## 1. 研究開始当初の背景

国内・国外の研究動向及び位置づけとしては、長崎の教会堂については川上秀人『長崎の教会』（改訂版 2007）などの研究の蓄積があり、それを基盤にして世界遺産登録活動が継続されている。パリ外国宣教会（1653年設立）に関する研究は近年盛んである。宣教会

の紀要『研究と史料 *etudes et documents*』7号(1999)の琉球と日本についての特集など、多数ある。しかし両者を関連づける研究は少ない。

筆者はこれまでラヴダン『パリ都市計画の歴史』の翻訳等の研究をとおして、教会、文化財、建築史の動向は複雑かつ密接につなが

っている複合体であることを認識した。長崎の教会堂に関しては文化財保存計画協会と2008年度より学術協力契約を結んだ。また長崎県教育委員会から2度にわたってヒアリングをうけた。2009年7月には長崎市等の教育委員会の専門家数名と現地を視察し、意見を交換した。

一般的に、日本の地方の文化財にかんする研究はモノグラフ的な研究にとどまり、普遍的な視野からなされることは少ない傾向にある。長崎の教会群についても、実証的な研究は豊富であるが、同時代のグローバルな教会建設との関連という視点は弱かった。つまりフランスの宣教師たちは、まずパリの外国宣教会で研修を経たのちに日本に派遣されるのであるが、宣教師たちの出身地での教会建設活動、そしてパリでの教会建設活動などが宣教師たちに影響を与えていることは容易に想像できる。

そもそも西洋の19世紀は、教会建設がきわめて活発であった時期であり、海外における布教とそれにもなう教会堂建設はそれと区別される事象ではなく、すくなくとも研究者の歴史観においては不可分のものとして意識される必要があった。

## 2. 研究の目的

19世紀後半と20世紀初頭において、カトリック教会の布教方針、パリ外国宣教会の動向、フランス国内の教会建築動向をおさえつつ、フランス人宣教師の母国と日本を縦断する伝記をまとめ、それらをとおして建築デザインが具体的にどのように伝わったか、あるいは理念的の共通性があったかを明らかにする。それにより長崎の教会堂のすくなくとも一部は、同時代のフランス教会堂建築の分派であったと解釈できるという結論を導く。

そのことによって、(1)日本で建設された教会堂建築の研究は一国史的なものにとどまっていたのにたいし、ローマ教皇とパリ外国宣教会の布教方針というグローバルな視点から日本の教会建築を論じることと、(2)19世紀末と20世紀初頭の、フランスと日本の教会建築を比較論的に分析し、その具体的関連性と同時代性を明らかにしようとするのである。

結果として、日本の教会建築を真に歴史的かつグローバルな位置づけができる。長崎の教会堂について新たな歴史的価値を発見することになり、世界遺産登録にむけて貢献できることが目的である。

## 3. 研究の方法

現地調査にさきだつて、文献により近代における教会建築の一般的な状況、カトリック教会とパリ外国宣教会の動向、フランス国内教会建築の動向などをおおきな背景として

調査した。

こうしたうえで、初期日本布教において教会堂建設に貢献したマルマン神父(Joseph-Ferdinand Marmand, 1849-1912)、ド・ロ神父(Marc-Marie de Rotz, 1840-1915)、フレノ神父(Pierre-Théodore Fraineau)らについて3年間の調査期間において1年1神父のペースで現地調査・資料収集をする。彼らがフランス/日本を縦断するなかで、どのような教会建築理念を形成し、それを長崎の教会堂建築に反映したかという視点から、宣教師ごとのモノグラフとしてまとめる。背景としての2項目と組み合わせて、総論を構築する。

調査研究は応募者が単独でおこなった。連携研究者、研究協力者は想定しなかった。

調査対象として、パリ外国宣教会(パリ)のアーカイブと図書館、フランス芸術図書館(パリ)、ブル＝アン＝プレス司教区司教会館でのヒアリング、カン市図書館、ルマン市図書館などを調査した。

収集した資料の整理のために、大学院生2名を作業の補助者として雇用した。19世紀の手稿資料のなかで、とくに判別困難なものはフランス人留学生に判読を依頼した。

## 4. 研究成果

(1) 現地調査にさきだつ文献による準備から、予備的な視点がえられた。

ロジエ『教会新史』(Rogier, *Nouvelle Histoire de l'Eglise 1-4*, Seuil, 1966)、アルデュラ『ピウス7世とボナパルトの政教条約』(Ardura, *Le Concordat entre Pie VII et Bonaparte*, 2001)、ボベロ『フランスにおける脱宗教性の歴史』(文庫クセジュ2000、邦訳)から19世紀の政教条約、世俗化、20世紀の政教分離法といった一般的な状況を調べた。とくに19世紀の反教皇的な趨勢のなかで、教会建築も行政管理におかれた状況を調べた。

つぎにパリ外国宣教会の動向についての予備的研究をおこなった。宣教会は1653年設立であり、その350周年を記念して近年は研究成果が多く刊行されている。グラドール『外国宣教会の美しい歴史』(Grasdorf, *Belle Histoire des Missions étrangères*, Perrin, 2007)、宣教会『アジア布教3世紀半の歴史と冒険』(MEP, *Trois siècles et demie d'histoire et d'aventure en Asie*, Perrin, 2007)などは布教史研究のごく一部であるが、それらを研究した。また宣教師モノグラフとしてはアリヴェ『P-Th フレノ神父』(Arrivé, *P-Th Fraineau*, 2008)などを参照した。日本を目指したフランス人宣教師は、母国におけるカトリック退潮という趨勢が、海外布教の情熱をうながしたことが判明した。

フランス国内教会の動向についての予備

的学習として、ルニオ『19世紀の大聖堂』(Leniaud, *Les cathédrales au XIXe siècle*, 1993)、テクシエ『20世紀パリの教会堂』(Texier, *Eglises parisiennes du XXe siècle*, DAAVP, 1996)などから、パリ外国宣教会の宣教師たちがパリで教会建築を学習していた同時期の、パリなどにおける教会建築の動向を調べた。一般的に宣教師たちは、同時代のフランスと社会を批判的な目でみていた。フランス19世紀において、司祭は公務員であり、教会堂は自治体所有の公共建築であって、教会組織はまったく疎外されていた。この状況にたいする憤慨が外国宣教熱をおおったのであって、こういう意味で国内と国外は連動している。

そして各神父を介して19世紀後半のパリ宗教建築と長崎の教会群のつながりが分かった。

(2) マルマン神父(1876年より日本)による教会建築について、その構想源が判明した。マルマンについては、神学校で司祭になるための教育を受けたブルー＝アン＝ブレス司教区の司教座本部を調査訪問し、司祭より19世紀における教会建築教育の教科書であった『宗教建築など・・・さまざまな芸術にかんして聖職者に有用な知識のマニュアル』(*Manuel de connaissances utiles aux ecclésiastiques sur divers objets d'art, notamment sur l'architecture des édifices religieux...*, Lyon, 1846)の提示をうけることができた。この書は、古代から16世紀までの教会堂建築の歴史について特定の建築様式に偏向することなく記述しており、イスラム建築についての説明もあるいっぽうで、構法や見積書の書き方など、実際的な項目について詳しい。

本研究を開始した時点では、マルマンは当時建設中であったパリのサンタンブローズ教会の様式や平面を知っていて、それを1890年代後半からの黒島教会堂設計に役立てたと仮定していた。

サンタンブローズ教会については、建築家テオドール・バリュは1874年に『サンタンブローズ教会のモノグラフ』をパリ市から出版している。彼はパリ市建築家であり学士院会員であったから、その出版はたいへんな権威をもって受け入れられたことは容易に想像できる。さらに出版や竣工前からあるていど有名であり、その概要は知られていたと思われる。

サンタンブローズ教会と黒島教会の類似性は顕著であり、前者にかんするモノグラフを建築家バリュが出版したのは1874年であるので、マルマン神父はパリでそれを知る機会があった。しかしその知識を設計にやくだてたのが90年代後半であるとする、直接の影響というのも考えにくい。

マルマン神父は1876年にパリを出発して日本にむかった。パリ外国宣教会のアーカイブなかの書簡と死亡報告書から、1896年に病氣療養のため数ヶ月香港のサナトリウムに入院したことが判明した。さらにこのサナトリウムとは、パリ外国宣教会がアジア布教の拠点施設として1875年に竣工していた香港のベタニーのことであることが判明した

(Le Pichon, *Béthanie et Nazareth, les Pères des Missions Etrangères à Hong Kong*, 2008)。さらにこの施設は病棟と礼拝堂からなり、後者は小規模ながら、13世紀の初期ゴシック様式であり、尖頭アーチ、リブヴォールト、簡素な高窓からなることが判明した。建築史学様式論の一般的な解釈として、黒島教会の様式はこの香港の礼拝堂に由来するとみなして確かであろうと結論づけた。

さらに建設の責任者であったオズーフ神父は1873年中に、パリの本部にテレグラムで平面や様式などの意見をうかがっていたし、当時のパリで話題となっていた教会堂がパリ本部の脳裏にあっても不思議ではないという状況の整合性も確認できた。

以上から、サタンブローズ教会からベタニー礼拝堂、そして黒島教会へという影響関係がかなり説得力あるものとして措定できた。

#### (3) ド・ロ神父について

ド・ロ神父は1862年にパリ外国宣教会の神学校に入学し、その神学校中庭に旅立人の聖母マリア小礼拝堂の建設を監督した。1867年ころパリで建築を学んだ。1868年来日。出津教会(1882年)は、前述『マニュアル』392頁のものに、3廊式、内陣の構成、などの点で酷似している。これは『マニュアル』から出津への直接的な影響というより、19世紀後半に小規模教会堂の一般的な形式として通用していた形式の遠隔地への適用例であろうと解釈できる。

#### (4) フレノー神父について

フレノー神父は、1872年から73年までごく短い時期にパリで研修し、1888年から旧「浦上天主堂」の設計を始めた。彼はみずからプランを構想し、彫刻社装飾のデザインまでがけた。現場監督もみずからおこなった。ロシア、イギリス、フランスの商人相手にコンサートを開催し、収益を建設費にあてた。教会堂は、双塔で、中央に三角形のペディメントがあるという形式は、サンタンブローズと同じであり、やはりこれも19世紀後半のフランスでは類例の多い形式である。

#### (5) まとめ

サンタンブローズ教会、聖職者用の教会建築教科書『マニュアル』の発掘、ベタニー

礼拝堂の発見などで、長崎の教会群と、パリなどフランス教会建築の、同時代性や繋がりが確認できた。フランス国内におけるカトリック退潮と、アジアにおける活発な布教はあきらかに相互補完的であり、このことから逆方向に、アジアからフランスをふりかえることで、近代初頭のフランス教会建築をグローバルな視点から再考察する可能性も開かれると思われる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計1件)

パリと長崎の教会堂建築の類似性に関する一仮説：パリ外国宣教会に関する研究 その1、日本建築学会学術講演梗概集. F-2, 建築歴史・意匠、2009

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

土居 義岳 (DOI YOSHITAKE)

九州大学大学院・芸術工学研究院・教授

研究者番号：00227696

(2) 研究分担者 なし